維摩詰所説経と吉蔵

三桐慈海

一

経典といわれるものは、味読を重ねるたびにそこに気づかされていくもので、それによって読む者の心が広げられるようである。多くの人々によって好んで読み続けられてきた経典には、殊にそのようなはたらきがあるようで、維摩経もその一つといえよう。僧伝によって見ても維摩経の講義がなされたり、注疏が著わされたりしたことが多く記されており、現存する維摩経注疏も少なくはない。そしてそれらの中での隋の吉蔵の注疏、いわゆる玄論、義疏、遊意そして畧疏といわれる疏の存在には多くの課題を見ることができる。

摂嶺興皇相承を自負する吉蔵にとって、維摩経は若い時から馴れ親しんできた経典であり、羅什、僧肇や道生の注疏も伝承してきていると思われる。師法朗の講説を覆述するに始まり、自らも講義をするなど、恐らくその回数は法華経講述の三百遍に勝るとも下回ることはないと考えるべきであろう。しかし吉蔵が撰述した維摩経の諸疏は長安に入ってより五六年の間の撰述である。それがどのようなことを意味しているのであろうか。またそれらの撰述が満を持したものであるとすれば、それはどのような方向で考えていこうとしたのであろうか。これらについては詳細な検討が必要であろうが、維摩経をどのように読んでいくのかという側面よりいささか眺めてみたい。

二

浄名玄論の冒頭には吉蔵自らがその撰述の意図を記し、維摩経義疏にも撰述についての記述がある。したがって維摩経に関わる諸疏の成立については、既に詳細な研究がなされているのであるが①、それらの成果に依りながら少し視点をずらして眺めてみると、どのように考えることができるであろうか。敢て繁をいとわず吉蔵の記述を挙げて、その一一についての推測を加えてみたい。

金陵沙門釈吉蔵、陪従大尉公晋王、至長安県芙蓉曲水日厳精舎。養器乖方、仍抱脚疾。恐旋南尚遠、而朝露非奢。毎省慰喩之言、遊心調伏之旨。但蔵、青裳之歳、頂戴斯経。白首之年、翫味弥篤。願使経胎不失、歴劫逾明。因撰所聞、著茲玄論。（後畧）　（浄名玄論）

余、以夫開皇之末、因於身疾、自著玄章。仁寿之終、奉命撰於文疏。辞有闊略、致二本不同。　（維摩経義疏）

既に考察されているように浄名玄論が撰述されたのは、晋王楊広が皇太子の位についた開皇二十年十一月以前であることは、「大尉公晋王に陪従して」と姚帝に対して晋王の称を用いていることで明かである。吉蔵は楊広に随行して長安の日厳精舎にはいり、その第一声として玄論を著わしたと思われる。会稽に在っては法華経の玄論と義疏をまとめ、慧日道場にはいって三論玄義と勝鬘宝窟を著わして、江南の仏教界にその地位を築いてきた。しかし隋の都である長安の仏教界に対しては、「金陵沙門釈吉蔵」と名乗って遠慮を示し日厳寺沙門とは記していない。長安や洛陽を中心とする北地の仏教界では、十地経論や摂大乗論などの唯識系の経論の研究が盛んに行なわれており、たとえ羅什からの伝統は残っていたとしても、中論などの三論の研究は過去のものとして主流とはなっていなかったであろう。論の研究が盛んな場所では経の注釈でもって対応することが有利である。法華経の注疏については既に吉蔵の名は長安に伝わっていたと考えられる。また維摩経の注疏としては浄影寺慧遠の維摩義記が流布していたことでもある。吉

蔵にとって維摩経は若くより学んできた経典であり、三論の宗義を発揮するに最も適したものとして、自信をもって長安仏教界に対応できると考えたに違いない。「蔵、青裳の歳、斯の経を頂戴し、白首の年、翫味いよいよ篤し」と、博く南北を採り古今を捃拾して玄論を著わしたことを強調している。江南に在っては繰返し維摩経の講義が重ねられてきたに違いないのであるが、注疏の形にはされていない。その理由は明かではないが、吉蔵の本格的な著述が法華経の疏にはじまると見るならば、それに続く慧日道場での著述活動を通して、あらためて摂嶺興皇相承の三論の宗義と江南仏教界で身につけた熟成した講経方法とを整理する意味もあったのであろう。江南を発って長安に入った経過の中で、北地仏教界にその三論の宗義を布衍させていく端緒とすべく、最も適した経典として維摩経を選び玄論を著わしたと考えられるのである。そしてやがて中論疏などの三論の注疏をはじめとして、多くの注疏が著わされていったのである。

浄名玄論撰述の時期は開皇十九年より二十年の間と推定されている。それは維摩経義疏に「余、それ開皇の末をもって、身疾によって自ら玄章を著わす」と記されていることによる。身疾によるとは玄論に「器を養うに方に乖い仍て脚疾を抱く。恐く南に旋るもなお遠く、朝露奢らず」と記していることを示している。日厳精舎に住してより身体が不調の上に脚疾に悩んでおり、体調に自信をなくしていた。しかし「毎に慰喩の言を省み、心を調伏の旨に遊ばす」ことによって、自らの疾いを克服しようとしていたのであり、それは維摩経問疾品の中での有疾の菩薩を慰喩し心を調伏する方法を説く文をさしていることは言うまでもない。ところで維摩経の読誦研鑽によって疾患の慰喩調伏をしようとしたのではないかという指摘は興味深い視点である。[2] それは吉蔵自身の疾病もさることながら、長安における有力な人に対してなされた行為と考えるべきでないであろうか。それならば誰に対しての思い入れであろうか。開皇十九年に晋王楊広に倍従して長安に入ったとして、二十年十一月に兄である皇太子楊勇を廃して、楊広を皇太子位につけたのは生母の独孤皇后のはたらきである。そして皇太子となった翌年に皇后は崩御している。体調の勝れない独

孤皇后に対して、吉蔵が自らの疾病に寄せて浄名玄論を著わし、それを楊広に提出したと考えてみるならば、吉蔵が長安に入って間もなく維摩経の玄論を著わした意図の一端をうかがえるように思われるのである。そしてそのような見方に立って考えることができるならば、慧日道場において勝鬘宝窟を著わしたのは、長安の独孤皇后にむけて勝鬘夫人に擬しての講述を行ったと見ることができるかも知れない。また「仁寿の終、命を奉じて文疏を撰す」という維摩経義疏の記述は、楊広が父である文帝の不例によって、吉蔵に注疏の撰述を命じたとも考えられる。その文帝は仁寿四年に崩御しているのである。以上のことからするならば吉蔵が維摩経の注疏を著わしたのは「開皇之末」「仁寿之終」の記述の通りに受けとってよいのではないかと考えられる。

それでは現存する玄論と義疏、そして畧疏といわれる義疏が著わされた時期はどのような関係になるのであろうか。義疏の文では「玄章」と「文疏」の語がみられ、「辞に闊略あり、二本を致すに同じからず」と記述されている。その場合に「文疏」は「文の疏」であるが、「玄章」は「玄と章」であるのか「玄の章」なのか明確でない。長安で後に撰述された法華統畧には「昔在会稽、著此経玄文凡二十巻。」とあり、この「玄文二十巻」を「玄と文の二十巻」とみて、法華玄論と法華経義疏とを考えるのであるが、その法華経義疏と維摩経畧疏は同じような形態をとっている。開皇二十年に浄名玄論に続いて畧疏が撰述されたとも考えられる。しかし「玄章」と「文疏」の語の対応から考えると、玄論と義疏とみる方が素直に読まれる。また「闊略」とは同じく義疏に「又諸仏説法、有略有闊。闊即一部之文、略即一経之題」[3]とあり、闊は随文釈にあたる義疏、略は経題釈にあたる玄論とも見られる。このように考えてみると、開皇二十年に浄名玄論、仁寿四年に維摩経畧疏、そして続いて大業の初めに維摩経義疏と考えた方が無理がないようである。すると維摩経義疏の記述は次のように読まれる。「私は開皇の末に身疾によって玄論を著わし、仁寿の終りに命を奉じて文疏を撰した。その文章は経文と経題があるので、二本をなしたが同じでない」ということである。「闊畧」を疏畧や広畧の意味にとらない方がよいようである。

三

維摩経は実に巧みに構成された経典であり、大乗仏教における理想的な菩薩像を、維摩詰という一居士に託して画がき出そうとしている。その中心となるのは「時に維摩詰、黙然として言なし」という入不二法門品であるが、入不二の菩薩の究極の姿を全体にわたって雄弁に語ろうとしている。例えば心浄土浄を説く仏国品は菩薩行によって得た心の世界であり、方便品に示される法身はその姿である。江南に在って三論の宗義を三論玄義に集約し、一乗義や法身義など重要な宗義を法華玄論にまとめ、仏性義を勝鬘宝窟において明かにした吉蔵が、長安に至って身疾に事よせながら浄名玄論を著わしたことは、かなりに意欲的なものがあったと思われる。それは煩瑣であると批判されるまでに講経が盛んであった江南仏教界において、それを嫌い禅観を重んじた三論宗の伝統の中で育ちながら、伝承された二諦義を基盤として、禅観の実践性を講経の中に如何に表現し得るかという課題を実現させることであったと思われる。吉蔵は諸経典のそれぞれがもつ課題を、無所得中道の体現という一点に集約的にしぼり込むことによって成り立たせながら説明した。その意味では維摩詰の入不二が、無所得中道の体現そのものであるということにおいて、吉蔵の考え方が最も表明され得る経典として、維摩経があったと言い得る。

浄名玄論の初めに吉蔵は

説曰、夫法身無像、物感即形、至趣無言、而玄藉弥布。故知無像而無不像、無言而無不言。以無像而無不像故、住如幻智遊戲五通。無言而無不言故、即張大教網、亘生死流。

と挙げ、この経が人法双挙であり、人は浄名、法は不思議解脱であると述べている。もともと無執著無所得という悟りの世界は、形を執らず言葉もないところであるが、衆生に対応して自在に形を執り言葉でもって表現する。自在に形を執り教えを説く姿を維摩詰の上に見ているのである。この論調が鳩摩羅什の弟子僧肇のものであり、註維摩経の

法身釈のそれと、般若無知論の「無知故無所不知」によるものであることは言う迄もないが、それを衆生教化の姿と智慧のはたらきである教えとして、具体的に表わすために用いているのである。即ちもともと言葉を超えた世界であるからこそ自由自在に言葉としてはたらき出し対応する者の能力にぴたりと適応して教えが説かれ、その者を言葉を超えた世界に引き入れることができる。「無言にして言わざることなきが故に即ち大教網を張る」とは、そのことを言わんとするものであり、吉蔵が好んで用いる「適化無方」の語も同じ意味である。法身無像についても同様のはたらきとして示しているのであるが、続いて吉蔵は法身と教えの関係を、三種般若を用いて不思議解脱の説明において述べている。それは「不思議境に由て不思議智を発し、不思議智をもって不思議教を吐く」というのである。不思議境を体得することが不思議智であり、智によって境が明かにされて不思議教が示される。「受化の徒をして教を藉りて理に通ぜしめ、理に因て智を発さしめんと欲す」ともいうから、不思議境は理であり、理によって智を得たときに法身の無像無言の世界が成り立つことになる。そしてその智より教が示されるから、理の境と智によって成る法身から教が示され、受化の徒は教によって法身を得るということになる。また「維摩詰不思議解脱の本は不二法門をいう。然るゆえんは、不二の道を体するに由て、故に無二の智あり。無二の智に由るが故に能く適化無方なり」ともいうから、不可思議解脱とは入不二法門である。吉蔵は維摩経に説かれ、その副題にもされている不思議解脱の世界を入不二として把握し、入不二法門品に説かれている諸菩薩と文殊と維摩詰の三様の相を三階の説として位置づけることにより、浅より深へという実践法門として受けとったのである。

三階の説とは㈠衆人（菩薩達）は不二ということは説明しても、不二は無言であることを明かしてはいない。㈡文殊は不二無言を明かしていても、無言であることを言葉に出している。㈢浄名は口をとざし黙して不二無言を観察しており、無言であることを言わない、この三種であるという。これに対して疑難が出た。「至趣無言、玄藉弥布」というのだから、黙して何もないことよりは、文殊のように不二無言を語る方が深いのではないかというのである。そ

れに対し「理の浅深を明かし、未だ応物垂教を弁ぜず」と、根機に応じた教化のための段階を言うのではなく、理を体している度合いの深さを言っているのだと述べる。吉蔵は中論疏にも三階の説を立て、浅より深へと向わせる手だてとしている。またそれは文殊師利問疾品の釈の中で、有疾の菩薩の心を調伏する方法として、経文によって衆生空、諸法空、空病亦空の三門を立て、「この三門を用いて心を調え伏せしめよ」と述べていることと類同していると考えられる。そこで三階の説を結ぶ中で、「迹を三根に託するゆえんは、もと物を引かんがためなり。下根の悟浅きは但だ初門に詣る。中人小しく深く、漸に第二に階す。上根は理に徹し玄室に蔚登す。また上根は初めを聞けば則ち領す。中人は二を待って始めて悟る。下根は三に至って方に暁かなり」と、衆生を深に引くためのものであることを述べているのである。このように入不二法門品に説かれている様相を、三階に分けることによって、三論宗の仏道体系として組み入れているのである。そこで続いては十種の実践的な課題を三門において説明していく。例えば聞思修の三慧について三門で釈し、治病ということで凡夫の惑と小乗の流そして菩薩とに分けて、大乗菩薩道に向わしめる。その第十にあたる「摂法に約して以て三門を釈す」項では五階を立てるにいたる。すなわち初階は空と有などの相待した二であり、第二階では空と有を二、非空有を不二。しかしこの不二を相待して執われれば、還ってそこに二を成すことになる。このように非非と。非非不二の不二を立てても、また二を成すことになる。また生心動念を泯ぼして不二を立てても、泯不泯の二を成すことなってしまい際限がない。だからといって二とは別に法があるのではないから、不二を法として把える限り二となるのであって、不二は二を止息させるよりないのだと述べている。このように吉蔵によって、三論の宗義である無所得中道が示され、維摩経そのものが三論宗の実践体系として用いられているのである。浄名玄論を撰述した意図は、既に考えてきたように種々の側面をもっている。長安に入っての第一声であり江南の講経を示すこと。あるいは病いの治癒を願ってのことかも知れない。しかしその最も吉蔵が示したかったのは、三論の実践体系を維摩経講経の中で、どのように生かしていけるのかということであり、それが長安仏教界にどれだけ

の波紋を画がき得るかということにあったと思われるのである。

浄名玄論は吉蔵得意の宗義を駆使して、維摩経の玄意を論じている。また、維摩経略疏は諸経論や諸師の説をちりばめて解説する随文釈であり、その知識の該博であることを示している。それに対して維摩経義疏は初めに玄義を述べて、続いて随文釈を出しており、玄論と略疏を合せた形態となっている。玄義の部分は四門を出しているが、玄論の要約の内に新たな問題を提起し、随文釈の部分は略疏を整備し補充訂正も加えられている。義疏は大業年間の初めに著わされたと推定されているが、どのような事情があって補綴しなければならなかったのであろうか。義疏の冒頭は玄論のそれとほぼ同文であるが、続いては教判についての見解を述べている。それは「この経は衆聖の霊府、方等の中心となるものである」とし、ただどんなにすばらしい奥深いものでもそれを五時に妄執させて、理は十分でないといい、あるいは虚しく四教を談じて完全でないと言っているとして、「私吉蔵が謹しんで維摩経に思いをめぐらし、五時四教の得失を考えてみると、五時である四教であるなどと穿鑿することは廃して、一極の奥深い宗旨を立てるべきである」と述べる。このように維摩経を第三時抑揚教としたり、第二時三乗通教に位置づけ差別して、理を尽していない半字であるとすることは正しくないと批判し、維摩経そのものの価値を見るべきことを主張する。そしてその根拠として法身常住が説かれているというところを経文より列挙して、無常身を説く域を出ないという見解に対応する。吉蔵はここでは一応は仏一代の教を判釈して、華厳経・三蔵教・般若等教・法華教と四門に分けるが、それも持論の菩薩蔵の摂と声聞蔵の摂の二類に収約せしめているのである。これは浄名玄論では十分に論じていなかった課題であり、北地においていずれは明かに自己の主張を述べなければならなかったのであろう。

以上のようなことから維摩経に関する吉蔵の諸注疏について考えてみると、長安に入った第一声として玄論があり、続いて敕命を受けて撰述した注疏がある。一応この注疏を現存の略疏にあててみることにして、その四年の間に講説してきたことを、敕命によって取りあえずまとめたものであろう。しかしその間に提起されてきた幾つかの問題があ

り、それらを整理すべく維摩経義疏をあらためて撰述したと考えられるのである。あるいはそれが姚帝が帝位についたことと関わるかも知れない。

四

維摩経には多くの課題として取りあげるべきものがある。初品は序品ではなくて仏国品とされている。維摩詰所説経を翻訳した鳩摩羅什は、「経の始終は浄国に由る。故に仏国を以て篇に冠す」と、仏国品と名づけられた理由を説明している。すなはち羅什によると、維摩経は浄国を説いた経典であると理解されているのである。[4] 浄国とは、宝積の「唯願わくば世尊、諸の菩薩の浄土の行を説きたまえ」という要請に応えて、「この故に宝積、もし菩薩が浄土を得んと欲せば、当にその心を浄むべし。その心浄きに随って則ち仏土浄し」と教示されるのであるから、維摩経は菩薩の浄土すなわち菩薩の世界を示そうとした経典であるといえよう。一方この経典が劇的な物語風の内容をもっていることは周知のことである。したがって物語的な側面と仏教の重要な思想とが、巧みに織成された形態をとって表わされているのである。吉蔵もまた「仏国土を浄め衆生を成就するは、けだしこれ菩薩の要行」として、「長者献蓋」と「宝積問浄土之行」の二義があると解説する。長者献蓋とは仏国品においては、宝積が仲間の長者子五百人と共に衆会に加わり、それぞれが七宝で飾られた宝蓋を仏に供養する。仏はそれを一本の蓋として、その中に諸仏の国土の相と諸仏の説法を顕現せしめる。そこで宝積は偈頌をもって仏を称えたうえで、清浄である仏国土を得るために菩薩の浄土の行を説くことを請うている。これに対して吉蔵は五種の意味を挙げている。[5] 一は現実的な事として一本にして用いるということ。二は一本にすることによってそこに諸仏国を現じ、これによって浄土の法門を説くことができる。三は不思議解脱の宗義を示そうとするもので、それによって衆生に利益をあたえ信解の心が固まる。四は諸法は決定相があるのではなく、多義といっても定んで多ではないことを示す。五には長者達が現にいて同じく無生を悟り、

将来に同じ法身の果を得ることを表わしている。このような吉蔵の解釈を眺めると、五百本の蓋を一本にまとめるという、一見考えられない現象をそれなりの合理性をもって説明していることが解かる。吉蔵が多くの経論に注釈をなしているが、その基盤となる考え方は、現実的合理的な立場から縁起と中道を明確にし、その基盤から諸課題に対処しているように思えるのである。また先に述べた三階の説においては浅より深へという実践的な面を示したが、入不二法門品の維摩と文殊の位置づけについては、「聖説法」と「聖黙然」をもちいて同格とすべく解釈している。これもまた合理性を示そうとしていると考えられる。

註

① 吉蔵の維摩経の注疏についての研究は諸氏によってなされている。例えば村中祐生「浄名玄論について」(印度学仏教学研究13―2)。大鹿実秋「浄名玄論序の序」(密教学16・17合併号)。そして「曹洞宗研究紀要」(14～19号)には浄名玄論の詳細な研究がなされている。殊に浄名玄論の成立などについては花塚久義「浄名玄論研究序説」(同14号)には、本稿で取りあげたほとんどの課題が論究されている。それに先立つ平井俊栄著「中国般若思想史研究――吉蔵と三論宗派――」(春秋社一九七六年刊)にも、維摩経の注釈三書の成立前後等について論じられている。菅野博央「維摩経分科に関する智顗と吉蔵の比較」(印度学仏教学研究33―1)では智顗の維摩経疏が講じられていることと、吉蔵の義疏が成立した関係に注意が払われている。

② 「浄名玄論研究序説」で花塚氏はこの問題を詳しく論じておられる。

③ 続いては「摂闊為略、為受持故。開略為闊、為解義故」とある(大正38・913c)。

④ 注維摩詰経「仏国品第一什曰。経始終由於浄国。故以仏国冠於篇也」(大正38・328a)。「経の始終」を仏国品の中でのみ考えたこともあるが、やはり維摩経全体として見るべきであろう。拙稿「浄土の意義について」(仏教学セミナー第21号)

⑤ 略疏と義疏では後者の方が整理されている(大正38・924b)。